

論文「なぜ自己免疫疾患がないのか」を読んで受診。

「ヘルペスとの闘い（メニエール病・下垂体炎・リンパ腫・髄膜腫・線維筋痛症）途中経過」

堀 三華子 49 歳

2017年5月24日

2015年、仕事で非常にストレスを抱える中、メニエール病を発病し、年末には37度越えの不明熱が続き、2016年の年明けには頸部リンパ節が次々と腫れて呼吸も困難になるような状態になった。父親が悪性リンパ腫を罹患しており、同じ病ではないかと疑われ、リンパ腫を生検して確定診断をすることになった。生検で悪性リンパ腫は否定されたものの、術前検査のMRIで脳に左蝶形骨縁髄膜腫と下垂体腫が見つかった。下垂体が炎症を起こして腫れているが故に不明熱や倦怠感などがあるのでは？と考えたが、主治医曰く不明熱、リンパ腫は生検の結果、皮膚病性リンパ節炎（原因不明）の病状を示しており、脳腫瘍と下垂体腫は関連性が無いと断定されてしまう。その後、不明熱が何ヵ月も続き、視床下部炎症によるホルモン異常で体重増加、高プロラクチン血症による無月経症、メニエール病も頻繁に再発していたが、その間、何の治療も無いままだった。

とにかく治療したいと藁をも掴む思いで、下垂体腫は炎症ではないかとインターネットで調べていくうちに「自己免疫性下垂体炎」という病名を知る。症状のほとんどが当てはまっていたが、原因は不明でステロイド薬の対症療法しか無く、しかも確定診断するには脳の生検が必要とされた。生検は頸部リンパ腫時の後遺症（痺れ、リンパの滞りによる全身の浮腫み等）の怖さを引きずっているのでは、生検をせず治療に移れないものかと主治医に相談したものの、治療に移るには生検の上、確定診断が必須で、主治医の見解では脳の生検はリスクが高く勧めないとの返事。ここでこのまま治療することなく、治すことを諦めたくないとの思いで医療関係の書物や医大の講義の動画やインターネット等で調べていく中で、やっと松本先生の「なぜ自己免疫疾患がないのか」というホームページの論文に辿り着いた。

松本先生の理論に感動し、患者の方々の手記を読み進むにつれて、松本先生のおっしゃる真実を体験し、この病を良い方向へと転換したい！という強い気持ちと希望が湧き上がってきた。ストレスを受けるとそれに対抗して副腎でス

テロイドホルモンが大量に作られて免疫を下げてしまうということは目から鱗だった。何ヵ月も原因不明だと言われ続けていた病に「必ず治るよ！原因はヘルペスや！」と開口一番に言って下さった松本先生の言葉は常に心の拠り所となっている。抗ヘルペス薬であるアシクロビルと漢方（煎じ薬、鍼灸）で免疫を高める治療が開始され、頸部リンパ節腫もほとんど無くなり、高い時は38度が続いていた長期にわたる不明熱が下がりきり、身をもって松本先生の理論を体験することができた。

下垂体腫も縮小しており、ホルモンの値も正常値に近づき高プロラクチン血症、下垂体炎症はヘルペスが原因だったのだと強く感じる。現在は髄膜腫の手術を控えており、まだヘルペスの値（単純ヘルペス 102.8、水痘帯状ヘルペス 116.1、EBウイルス 8.7）が高く、倦怠感と針で刺されるような頭痛、全身浮腫み等が酷い状態だが、これは自身が本気で治そうとしていなかった事が招いたことだと冒頭の松本先生の叱責で気づき、猛省している。

松本先生の理論が真実であることが、医療の現場で常識となり、抗ヘルペス薬が保険適用で処方され、1人でも多くの患者が治療に対して受け身ではなく「自分の免疫が治す」という意識が高まる世の中になるように自分ができることを一歩ずつでも行動していきたい。

松本先生が本気の治療をして下さっていることに自身の元気な姿をもってお応えしていく決意です。本当にありがとうございます。



